上高井教育会報

第187号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　宮崎達夫
編集人　会報編集委員長　市川武彦
印刷所　須坂新聞社

学校以外の職場で学んだこと

藤沢　袈裟一

私は、今までに二回、合計六年間、学校以外の職場に勤務したことがある。

その一回目は、三十代半ばから三年間、長野県教育史刊行会で、「長野県教育史」の史料編の編集に携わった。南信や北信の小学校を経て、ちょうど一〇年目の年からであった。

初めての編集の仕事で、戸惑うことが多かったり、史料の選択・編集・割付・校正と仕事に追いまくられる毎日ではあったが、充実した日々であり、多くのことが学べ、私にとって大変意義のある期間であった。

まず第一は、仕事の関係上、教育に関する多くの書物を読むことができたことや大正時代の半ごろから敗戦までの教育思潮や県内各地での実践にふれることができたことである。

二番目には、教員として学校現場を外から見ることができたことである。

自分が日々行っていた実践や学校現場の実態を冷静に振り返ることができ、学校に復帰してからの自分の実践に大きな影響があった。

三番目は、編集員同士が、妥協を許さず一つのことを徹底的に討論できたことである。

二回目は、四〇代前半の三年間を、長野県埋蔵文化財センターで発掘に従事した。

この仕事をしている間も、前回と同じようなことを学ぶことができたが、特に人との接し方で多く学ぶことがあった。

遺跡の発掘は、多くの作業員さんによって支えられている。多くは、一線を退いた人生経験豊かな人たちである。そのような人々と一緒に働くことを通して、人間的な幅を広げてもらえたのではないかと思う。また、気持ちよく働くためにどんなことが大切なものかも少しずつ理解できるようになってきた。

私は、幸いにこのような経験ができ、専門分野での研修が積めたこと、そして多くの人たちとの出会いにより、教員としての資質を向上させることができた。

「学社融合」「地域への学校の開放」が叫ばれているいま、私達は、学校以外の機関の人々から「学ぶ」ことが大切であろう。外からの情報を待つだけでなく、私達が積極的に外に出て、研修・研鑽を積み外から学校を見ることは、学校・教師一人一人の教育活動の活性化につながるのではないでしょうか。（高山小）

本校の中核活動――公民館に支えられた学習活動

須坂小学校

須坂小学校では、学社融合の考え方のもと、学校教育の中の、特に総合的な学習での授業を、学校と公民館がともに企画・運営をしている活動があります。今年度四学年では、社会科のゴミの学習から、遠足での清掃工場の見学、そして興味をもったリサイクルや環境問題へと学習を広げてきましたが、その学習の一環として、須坂市にある川がどのくらいきれいなのか、その中流や上流にはどんな生き物が住んでいるのか、を調べる学習に行くことができました。

行った川は、鮎川の千曲川に合流する手前のところから始まり、段々とさかのぼっていった中流の地点、そしてその支流となっている宇原川の上流です。公民館ではここ何年か続けて開催しているのだそうですが、子どもたちとともに、教師もその場でまさに生きている水中の生き物の多さに驚かれると同時にうれしさもこみ上げてくるものがありました。ひとつひとつ、新たな生き物を発見するたびに歓声を上げながら、眼を光らせて川の中をまさぐる子どもたちの様子を見るにつけ、自然とかかわる喜びを体験するというのはまさにこんな子どもたちの姿なのだと感じたからです。夏でもあの冷たい、ひんやりとした清流の心地良さ、そして、今まで見たことも聞いたこともなかった名前の水生昆虫の、不思議な体の形を、この眼や体で感じとれば、今の子どもたちにとっても、いや、現代の子どもたちだからなおさら魅力的な自然を体感できるのではないかと思うのです。

学校の中だけで、もしこれと同じような事を考えたとしても実現し難いことは、多くの先生方も悩まされている点ではないかと思います。子どもたちの移動、地域でその道に詳しい方や学習にふさわしい場所などの情報収集等々、ずくを出して研究を進めればできるじゃないかと言われればそれまでですが、どうしても限られた時間の中だけでは無理があるのです。

今、公民館の方々の力をこうしてお借りしながら子どもたちとともに自分も学んできて、本当にすばらしい機会をいただいていると感じます。

（高沢　恵）

教育会だより

8・25　教育会講演会（於市公民館三階ホール）
　　○講師　大野　勝彦先生
　　○演題　「大切な人の喜ぶことを」
8・31　第2回研究小委員会
9・1　第4回常任委員会
9・19　第5回同好会
9・20　女性・青年教師研究大会（於　市公民館）
9・25　第5回代議員会
9・26　第3回研究小委員会
10・7　上高井教育研究集会
10・13　第5回常任委員会
10・16　第6回同好会
10・10　上高井教育会報第187号発行

日々

海外視察

『美しいシェルナッハ村に学ぶ』

清水美和子

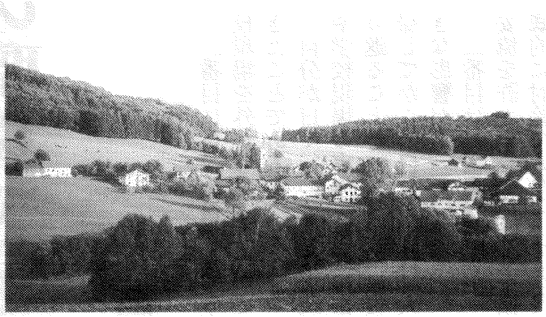
シェルナッハ村は、遠くにスイスアルプスを臨むドイツの片田舎。森や緑の丘が広がる中に赤い屋根がぽつぽつ見える美しい村で、ハイジの物語の世界に飛び込んだような桃源郷である。

信教欧州研修の旅の中でもシェルナッハ村での民泊は現実の生活の中に、日本が置き忘れてきてしまった大事なもの、特に人が育つ基盤の広さや確かさを感じる印象的な二日間でした。

大人を尊敬し、素直でたくましい子ども達の姿や、村のあちこちに手作り、ボランティア、学びの精神が伺える。

村長さんが一番大事に考えていることに「学ぶこと」がある。学ぶ意欲や工夫すること、技能をもっていることが宝であり、それは子どもに限らず、社会生活に浸透している。

自動車の修理は勿論、自宅や家具を自分で作るのが普通、幼稚園の遊具や壁の装飾も父母やプロのボランティアの作だという。それらの姿や技術を子どもは幼い頃から見て育っている。



学校は午前中だけで、午後は地域のクラブやボランティア組織に入って活動している。実際に子どもたちの自衛消防団活動の生き生きとした様子を見せていただいた。

職場にも見習い制度があって看護婦、保母、工員、事務員、教員など多くの職種で見習いを二年経験して資格をとっていくという。

年長者が年少者に、経験者が後輩に教えるのは当たり前の学びの社会がある。

また、美しい村づくりの努力が徹底している。

短く刈り込まれた草原が見渡す限り続いている。長く伸ばすと注意を受けるそうだ。また、牛や鹿を保護している。もし、けがをさせたら獣医を呼ばなくてはいけない。放置すると罰せられるという。酪農が盛んと言うこともあるが動物愛護や共存の配慮にも思える。

教会より高い建物はない。家々の赤い屋根、どんな花にも調和するという白い壁。そこにピンクや紫、赤のエーデルゼラニウムの花々は映えている。庭園保持クラブが村とタイアップして苗を育てたり、地域の環境美化に努めている。

勿論ゴミなど落ちていない。ゴミを出さない努力と三十四種類の分別収集、リサイクルが徹底している。

子どもは幼い時から、生活の中で行動を通して大人を見習いながらルールや技能、知恵を身につけて育ち、生き方に夢や希望を持って生活しているように見えた。

日本の、設定された現実味のない体験や知識中心になっている薄っぺらな教育でなく、学びが日常生活の中にどっしりと根を下ろしているのが印象的であった。

そして生まれた時からこの美しい環境と大人の姿を見ながら育っている感性こそが、美しい村を存続させている原動力かもしれないと思った。

（高甫小）

県外視察

融合カリュキュラム

小林　巧

1、視察年月日
平成12年9月14日（木）

2、視察校住所
群馬県高崎市八幡1300－1

3、視察校
高崎市立八幡中学校

4、視察テーマ　総合的な学習の時間、学級活動、学校行事等の「やるベンチャーウィーク」について学ぶ。（殊に、行政が積極的に後援し、市内が一丸となって、受け入れる体制を敷いておられる点）

5、視察概要
(1) 実施内容

高崎市内の全中学校の第2学年に在籍する生徒全員が対象となり、10月の第1週を基準に月曜日から金曜日の連続する5日間に各種体験活動を行っている。（八幡中学校では、9月11日～16日の週）その内容例は、農林業体験、職場体験、ボランティア・福祉体験文化・芸術創作体験、地域・郷土芸能体験、情報・科学技術・環境教育体験、その他の体験と多岐・広範囲にわたる。職業体験を選択した生徒が多いが、文化財センターでの発掘・資料整理を体験したグループ等もあり、趣旨どおり、進路指導行事のみならず「総合的な学習の時間」「学級活動の時間」にも運用している。

高崎市教育委員会に推進協議会をおき、A4版両面グラビア刷りのチラシを作成し、市内全域に広報活動、支援ボランティアの組織作りを行っている。新CSの変更目的（学社連携の為に学校がどう外に理解を求めるかという後進的な姿勢ではなく、連携がされて教材が多い中で、学校は、未来を担う目前の子供をどう教育するかという、教育の本来的立場）を良く理解したまさに学社連携と言える。

（小布施中）

県外視察

科学お楽しみ広場

中村文成

八月の二日から四日、千葉県で行なわれた科学教育研究協議会全国大会に参加してきました。

大会のメインはレポートの検討・協議。しかし一番の楽しみは「科学お楽しみ広場」なのです。これは自作の教材教具を実演まじりに販売するもので、会場の体育館には、さながら夏祭りの夜店のようにいろいろな物が所せましとならんでいました。

つな引きをしている時、両方がつなを引く力は作用・反作用によって同じです。力は同じなのに、なぜ勝負がつくのでしょう。これをプラモデルの戦車を使って示す実験がありました。両方で引きあって動かない状態の戦車の一台におもりを載せます。すると載せた方の戦車がおもりを載せていない戦車を引いて動き始めるのです。載せたことによって垂直抗力が増し、摩擦力が大きくなるのですね。つな引きには体重（と靴の裏の材質）が大事ということでしょうか。

その他にもクマの全身骨格やシカ・イノシシの前足やら、あやしいものがいっぱいでした。シカとイノシシの足を二本づつ買い求めビニール袋に入れてバッグにつめこみましたが、これがずい分とおって帰りの車中は苦労しました。

この大会では、たくさんの教具、すぐにでも授業に使えそうなプリントが手に入ります。しかし何よりも「ヤル気」をもらえるのです。参加された全国の先生方の熱意とヤル気が直接伝わってくるからです。

「これを子ども達に見せたら喜びそうだな」そんな思いが胸の中にあふれてきました。

（墨坂中）

自分発見

各種研修会に参加して

哲学同好会「歎異抄」を読む

竹前傳藏

今年度、哲学同好会では、昨年度に引き続き夏期研修として『歎異抄』を読む」をテーマに公開講座を開催した。講師には平成十年四月一日より東京大学文学部教授に就任された市内南小河原出身（相森中出身）の竹内整一先生をお願いし、今年で三年目のご指導となる。一年目の学習会では先生の著書「日本人は『やさしいのか—日本精神史入門』」（ちくま新書）をテキストに読み合わせを行ったり、また夏期研修では今あらためて死生観を考える」と題して先生にご講演をいただいた。そして、昨年度よりテキストを金子大栄著「歎異抄」（岩波文庫）とし、読み合わせを行ってきている。昨年度の夏期研修では、「『歎異抄』を読む」と題して第一条から四条までの内容について先生よりご講演をいただき、本年度は、第五条以降を中心にご講演いただいた。

また、昨年度より上高井教育会のミニ夏期大学を志向して理科同好会や算数・数学同好会と研修の同日開催の方向を探ってきた。昨年、本年度とも哲学同好会員を始め、理科、数学の同好会員の方々、また一般会員、及び関心をいただいている地域の方々の多数の参加を得て盛会のうちに夏期研修会を開催することができた。

さて、「歎異抄」は不思議な書物である。明治以来、多くの日本人に読まれてきている。それは、仏教徒に限らずまたキリスト教徒も感銘しつつ、それを読み、また宗教にいっさい関心を示さぬ人々もこの「歎異抄」を愛読してきている。その不思議の理由は何なのであろうか。文章そのものは短いものだが、その中には職業や身分などの立場や時代を超えて語りかけてくるもの、普遍的なものがあるからだろう。その普遍性は「歎異抄」の前段で親鸞上人が徹頭徹尾「自分はこう思う、私の信仰はこれなのだ。」とわがことに徹して語り続けておられるからなのかもしれない。その親鸞上人の思想と出会うべく、今後も「読み合わせ」の会や夏期研修を大切にしていきたいと思う。

（高山中）

大きな存在の初任研

坂口みすず

4月、教師になって初めて子供達と出会った時、私は期待と不安でいっぱいでした。それから半年が過ぎ、今までただただ夢中でやってきました。そんな毎日の中で、初任者研修は私にとって大きな存在でした。

まず第一に自分と同じ初任の先生方と出会えたことです。学級経営がうまくいかず悩んでいた時など、同じ初任者の仲間と話をしたり、一緒に研修することにより、気持ちが楽になり、励まされました。また初任者研修に行くとクラスの子供達から離れるため、さまざまな講義や実践を通して、クラスのことや自分のことを見直すことができました。そしてまた明日から子供のために頑張ろうという気持ちになりました。

私が初任者研修の中で特に印象に残っているのは、特殊教育諸学校の参観です。養護学校での体験学習の中で、私は一人の女の子と一緒に学習しました。その子は言葉を話すことができず、私は最初どう接していいか分かりませんでした。しかし、その子の好きなシャボン玉を一緒にやっているうちに、その女の子の方から手を握ってきたり、私が話しかけるとにっこり笑ってくれました。言葉はないけれど心が通じた気がしてとてもうれしかったです。ほんの何時間しか一緒に学習していないけれど、この女の子との出会いは、忘れられない思い出となりました。

初任者研修も、残り半分となりました。多くのことを学び、これからも子供達のために頑張りたいです。そして子供と一緒に私も成長していきたいです。

（日滝小）

本校の宝㉛　楡の木

仁礼小学校

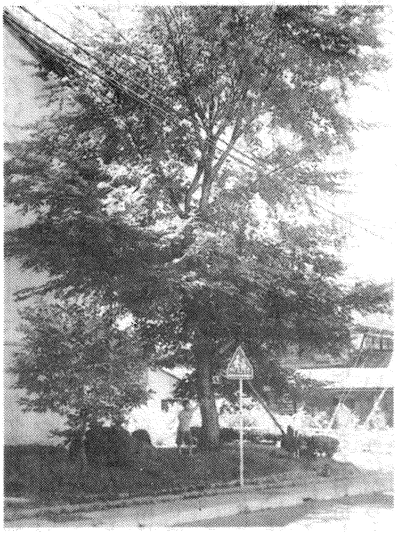
本校体育館西側に一本、校門向かって左に一本、楡（ハルニレ）の木がある。その体育館西側にある『楡の木庭園』にたてある由緒書には、「大笹街道沿いの当地には、遠い昔から楡の木が繁っていた。いつの日にか『楡』は、『仁礼』となって地名として今に伝わっている。楡の木は、仙仁山・山の神地籍に自生していたのを、平成二年十月に子どもの健やかな成長を願って移植したものである」とある。時代や社会の変化とともに、子どもたちと山との関わりも薄くなってきてはいるが、子どもたちを見つめる心豊かで厳しい自然風土こそが、本校の宝であろう。

本校は、平成十一・十二年度と、「長野県へき地・山間地・小規模学校教育」の研究指定を受け、十一月に研究大会を持つ。『生き生き楡っ子』（学校目標「自主創造・活力あるわたし」）を願いながら、「伝え合う力」の育成を目指す。そして、宅地化や各種公共施設の建設が進み地域の変容も著しい中にあって、厳しい自然と向き合う中で培われた力強く生き抜く精神土壌の上に立ち、二十一世紀を担う心豊かな地球市民として活躍して欲しいと願う。

今年七月、短期間ではあるがお世話になったM先生とのお別れ式でのこと。M先生の「楡の木は、材質が堅く、まっすぐに大きくなる木だそうです。どうか、みなさんも楡の木のように、力強く生きていってください」の言葉が、子どもたちの心をうった。楡の木と自分が結び付き、郷土を愛する心とともに、幾多の困難にも打ち克っていこうとする力強い意志とが漲っていくのを感じたに違いない。

羽ばたけ楡っ子、楡の木が見守っている。

（小林和市）



火ばち談義

心のジレンマ

澁谷和子

先日文化祭の準備をしていると数人の女子生徒が、「先生、見て。見て。」と授業で作ったパーカーをはおり、全身を自分なりにコーディネイトしてやってきました。そして、鏡の前でポーズを決めながら盛り上がっていました。

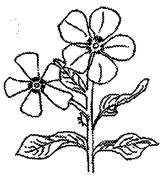
さてこれは何の騒ぎかというと、文化祭の中で行われるファッションショーに備え、事前に確認してみていたのです。この企画は前任の先生の頃から伝統的に行われており、これを目的に家庭科を選択してくる生徒も数多くいます。

しかし、私にとっては初めての経験でいろいろ聞きながら進めてきました。また、ファッションショーというステージ発表は抵抗があるという生徒には展示発表を認め、おおよそ半数が展示となってしまいました。

自分自身楽しみながら作るものの、それを活用したといった経験は乏しく、妙に恥ずかしく作るだけで終わっていました。そんな私の影響もあってか生徒達も、一工程が終わる度に嬉しそうに袖を通していたのが、いざ完成となったときに、試着を鈍るようになりました。でも、本当は先ほどの生徒と同じ「見て。見て。」と言う気持ちを心の奥底に持っているのです。

指導力の不十分さに加え、私自身のジレンマが生徒の気持ちを押さえてしまったのではないかと思います。そして、私自身の壁を崩すことを今後の課題にしていきたいです。

（高山中）



日々草

日野小　越　修一

がんばるバドミントン

斉藤芳樹

「いらっしゃいませ。」

「あのー、この辺でバドミントンやっているチームはありませんか。」

「そうだねぇ。」

その地区の中で力のありそうなスポーツやさんに聞いてみる。新しい所にくると、まず新しいチーム探しから始まる。

私はバドミントンをやっている。社会人になってから、これで5チーム目になる。まあ、そんなに強い方ではないが、スポーツに燃える。それがかっこよくて続けている。バドミントンをやっていると魅力がたくさんある。

まずは何と言っても試合。汗をふきかまえる、ダブルスの仲間と二、三言交わし、気持ちをつくる、相手とのかけひき、打つか落とすか、右か左か…楽しいものである。

先日の試合では一回戦から高校出位の若いダブルスに当たり、大苦戦。ドライブもスマッシュもだいぶおされていたが、何とか勝利。その後もハードな大接戦ばかりだったが、何とか決勝へ。決戦の舞台は一味違う。シーンとする体育館、チームの仲間同士の応援。緊張感ある試合。くやしい思いは山ほどしているだけに、滅多にない優勝は、嬉しい限りでした。

さて、魅力その2。試合の後の一杯。格別においしい。あの試合はああだった、この試合はこうだった、飲みながらみんなで言いあうのが楽しい。それに、みんなケタ外れに飲む。その雰囲気はやはり最高だ。

その3、仲間。バドミントンを通して色々な人達とチームになった。昔、一緒にやった仲間と県大会などで会うとなんだかとても嬉しい。また県大会目指そうと思ってしまう。色々な人達と出会い、話をするのが、とても刺激になる。

過去に右ひざを骨折しているので、いたわりながら…楽しんで続けていこうと思う。いつか強くなる日を夢に見て。

（旭ケ丘小）

タヒチの思い出

五味大仁

碧い海、青い空、白い砂浜。そんな言葉がピッタリなタヒチへ、夏休みを利用して新婚旅行に行ってきました。さて問題です。タヒチは地球のどこにあるでしょう？ 答えは南半球で、ハワイと赤道をはさんで対称の位置にあります。向こうの季節は冬で、時差は十九時間。飛行機で成田空港から直通で十一時間半。

タヒチの正式名称は「フランス領ポリネシア」と言います。地球上最後の楽園と言われ、自然が豊かです。そのタヒチの中でも最も美しいと言われるボラボラ島へ五泊しました。当然ホテルは水上バンガロー！しかも島からちょっと離れているモツといわれる小島にあるところで、ロケーションは最高でした。

まず、海がきれい。朝日が昇る頃ホテルに到着（なんと空港からボートに乗って）しましたが、太陽が高くなってくるにしたがって海の色が変わってくる。その海の中にきれいな魚が泳いでいて、パンをあげると群がってくる。養殖場のような感じでした。

日中は、午前中はシュノーケリングでカラフルな熱帯魚の鑑賞。シャークフィーディング（鮫やエイの餌付け）でも楽しめました。午後は昼寝。これがまた気持ちよかった。

食事ですが、ホテルではビュッフェスタイルで、曜日によって○○ビュッフェと決められていました。味はまあまあ、デザートはうまい。すまし汁みたいのもあったけど、日本の味にはほど遠い。そういえば、タヒチにはなぜかしら中華料理の店が多かった。最終日にタヒチ島の中華料理店に入って食べましたが、けっこうおいしかったです。

言葉はフランス語、ポリネシア語、英語。日本人観光客も多いので、日本語も簡単な単語なら何とか通じました。言葉は苦労しましたが、笑顔と愛嬌でごまかし。

南十字星を見ながら飲んだヒナノビールはうまかったなあ。のんびりと過ごしたタヒチへまた行きたいなぁ。

（中西・相川）

編集後記

各校では、運動会や文化祭が無事終了したことと思います。また、教育課程研究協議会等、研究を積まれ、子ども達にとっても、実り多き秋を迎えていることでしょう。本号では、研修に関する内容を中心に編集させて頂きました。ご多用中、原稿依頼を快くお引き受けくださり、貴重な原稿をお寄せいただきました先生方に深く感謝いたします。

（中西・相川）

マウルル！

（相森中）